

上 田 勉

歌えないふるさと 暮らし元に戻らない 避難後、涙あふれ「封印」

“兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川 ” 唱歌「故郷」と福島の被災者

「兎追いしかの山……」で始まる唱歌「故郷（ふるさと）」。山里の情景を描いたこの歌を、東日本大震災の津波や原発事故でふるさとを追われた福島県の人たちは、歌えなくなっているという。その理由を尋ね歩き、企画「歌えない『故郷』」（東京本社版⑤朝刊で9月24～29日、計4回）を連載した。震災後、置かれた境遇は異なるのに、みな、望郷の思いだけは変わらない。取材を進めて行くにつれ、その思いを深くした。

歌えない歌が1曲だけある

震災から5年になろうとしていた昨年1月、私は避難者が集うさいたま市のサークルを取材した。20人程が手料理を持ち寄り、穏やかな時間を過ごし、締めくくりは合唱だった。ところが、参加者の一人、津波で自宅を流された福島県浪江町の柴美江さん(71)から、思いがけない言葉を聞いた。「1曲だけ、歌えない歌があるの」。それが「故郷」だった。私はなぜか目頭が熱くなり、福島県にゆかりがある人に会うたびに、歌への思いを尋ねるようになった。その数は40人ほどになる。

中には「歌える」という人もいた。既に福島県に戻っていたり、埼玉県に定住を決めたりと、気持ちに区切りをつけた人が中心だった。一方で25人ほどが「涙が出る」「聴きたくない」と打ち明けた。我慢強いとされる県民性からか、日ごろの苦労も「仕方ない」と耐え忍ぶ人が多いのに、この歌の話をする、せきを切ったように言葉があふれだした。かつての暮らしを失った、無念の気持ちだった。

「故郷」は長野県出身の高野辰之が作詞し、鳥取県出身の岡野貞一が作曲した。1914（大正3）年発行の「尋常小学唱歌」に掲載され、100年以上にわたり歌い継がれている。2人の作品には唱歌「春の小川」や「紅葉（もみじ）」などがあり、日本人の心象風景を形作っている。

聴く度に感じる都会人との落差

一人娘を連れて長野県松本市に移り住んだ、いわゆる「自主避難者」の女性(37)も、この歌に涙した一人だ。今年6月、同市で開かれた震災のチャリティーコンサートに参加すると「故郷」が流れた。つらかったのは「こころざしを果たして、いつの日にか帰らん」と言う歌詞。「帰れるなら明日にでも帰りたい」と言う気持ちがこみ上げた。

この女性のように福島の人達は震災後、数々の条件や価値観の違いで分断されてきた。自宅は避難区域か、賠償金をもらったか、放射線の影響をどう考えるか、帰還するのかしないのか……。結果として県民の間にさえ、あつれきが生まれた。福島の人たちにとって、唱歌「故郷」を聴くこと、歌うことは、震災前の暮らし、そして帰還がままならない震災後の生活を無意識のうちに呼び起こしているのだと思う。（奥山はるな「毎日新聞」17年10月25日付け）

【“故郷”の原風景 木戸川と阿武隈山系（檜葉町）】



【のどかな田園に積み上げられている除染廃棄物（トンパッグ）（飯館村）】

